

## 別れては：文苑

著者	花柴
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 2 3
ページ	6 7 - 6 8
発行年	1907-12-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6079">http://hdl.handle.net/2298/6079</a>

贖の罪の跡、ふとみかへりて  
うなだれぬ。

かくてわが

眼光にてらされし罪の贖跡は

億年に消ゆるなく懺悔の胸に

鉄鞭あぐ。

たかしさよ。

こゝより見れば贖罪の人の笑止さ——

真日をも敷石にそひゆく罪の

影あるを。

(完)

別れては

花

柴

唯『運命よ』と睡れし眼の

君が睫毛に白玉とへて

怨言といはず——凭れたる

み胸の鼓動の温かき  
響は「時」の闇黒に  
消れて三年の恨かな。

いま人づまの君あれば

戀の生命はこゝとはに

絶てて醜き遺骸も

紀念と秘めし文がらの

文匣抱けば青春き日の

血汐に呪咀は燃ゆるなれ。

賜びし玉章とり出ては

焼かんに惜き跣踏よ。

紅梅に鶯啼くあした

青葉に戦ぐ涼風の宵

露に虫なく月の夜半

火桶に對す雪の日や

東屋はなれざしきの南窓みなみまど

紫檀しぜんのにぞう文机ぶんぎに

君きみや凭たかれてふくよかの

圓まらてくが玉首たまがしらの眞玉まぎよ手に

馨あかりはたかき唐墨からぼくを

赤間あかま關硯せきまがねに當あたてつらむ。

紅葉もみぢ流ながると透かし画ゑの

卷紙まきかみさらと擴げては

よき歌うたもがと項曲うなじまげ――

多澤たさわの前髪まへかみ揺ゆれにけむ。――

筆ふでの穂ほさきをみつむると

鳩とびの瞳ひとみぞ忍しのばると。

折し々しもらす、ため息は

鬢かみの後毛のちかみゆらがして

餘あまりは紙かみに戦ぎけむ

牡丹ぼたんを匂ふ唇くちびるに

印紙しるし、封ふうじ目め、――當時そのかみの

接吻くちづけのごと、――觸ふれにけむ。

燒やくに踏踏ふう夕かな――

涙なみだし流ながる徒たらに。

夢ゆめか文ぶんがら火にすれば

薄霧うすぎり落おちて低く這ふ

煙けむりの末すえの立たち姿すがた――

抱かかれば消きえて三ヶ月さんげつの影かげ。

古き調

白

月

月清つききよく

松風しょうふうくらき磯いそづたひ

たもわ背せむひけて行くは誰たれぞ

戀こひならば

母ははや待まちつらんとく歸かへれ